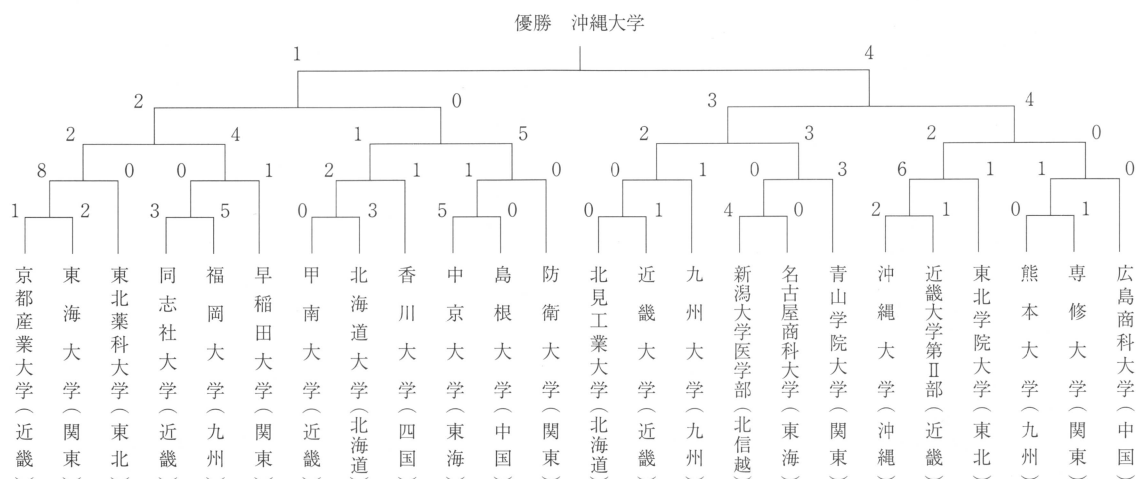


第24回全日本大会



北海道大	0	0	0	2	1	0	3
甲南大	0	0	0	0	0	0	0

(北)小島一船越
(甲)樽谷一和田
二塁打 好田(北)

思い出の全日本大会

大塚 道夫

部員がたった九人という我々の時代は、OBの方がたに助けられて春合宿を行なうという事態まで経験しました。特に私の学年の仲間は三人しかいず、グラウンドの整備や準備も互いに協力しあいながらやるしかない環境でした。よくもやり通せたものだとか懐かしく思うと同時に、間近な先輩や後輩にすばらしい人達がおられたことが、私をそのようにさせたのだと感謝しています。

四年間を通じて、もっとも鮮烈な記憶として残っているのは、なんとと言っても全日本選手権出場。代が変わったところでのOB総会の席上、「この戦力では、全日本選手権出場は無理だなあ」との梶木OB会長の言葉に発奮し、「何がなんでも全日だけは絶対に出場してやるぞ」と心に誓ったものです。それからというもの、地道な練習に明け暮れる日々を続け、なんとか出場権を獲得。私達の意地を引き出してやろうという先輩の狙いに、見事に乗ってしまった結果だったということでしょう。

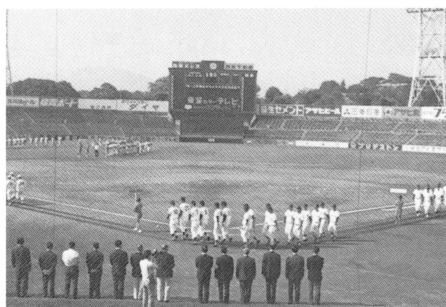
舞台は、福岡の平和台球場。西鉄ライオンズファンだった私には、特別の感慨がありました。二塁の守備位置に向かう途中では、必ずマウンドのプレートに触りました。憧れの稲尾和久投手が踏んでいた同じプレートに触れていることに、同じグラウンドでプレーしていることに胸が高鳴ったあの感動は、今も体にしみついています。「自分はなんてツイている男だ」との思いは、いま私の信念にすらなっています。

もう一つ大切なことを学びました。体力のなかった私は、外野の頭を越える打球がなかなか打てずに悩んでいました。その私に、ゴロを打つことの特典を教えていただいたの

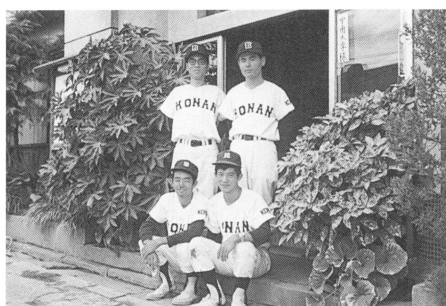
です。打球はイレギュラーする可能性がある、野手が後逸する可能性がある、野手が暴投する可能性がある、一塁手が後逸する可能性がある。この四つの可能性があるという指導でした。「だからゴロを打て。野球は頭でやるものだ」と教わったのです。

甲南準硬式野球の伝説は、このシンキング・ベースボールにあるのです。

この伝説を踏まえて、野球に創意工夫をこらし、勝てる野球を確立されるよう、後輩のみなさんに期待するだけです。



昭和47年 全日本大会 開会式



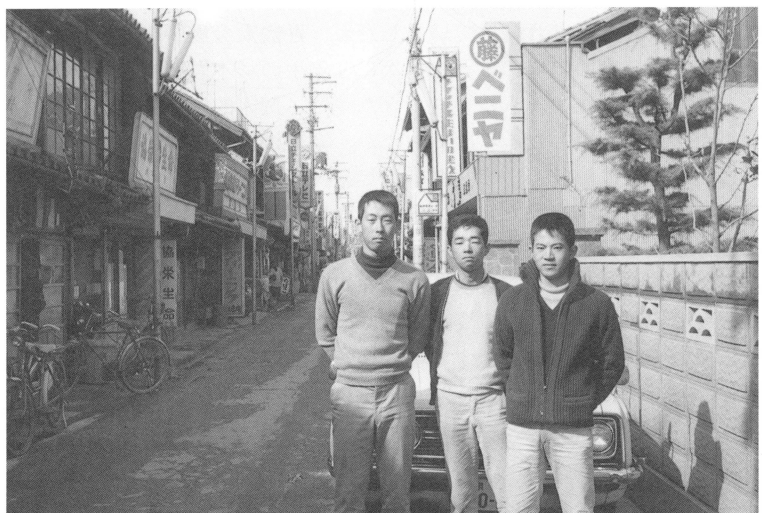
昭和47年 全日本大会 旅館前にて



S. 47年8月 全日本選手権 平和台球場での入場行進



S. 46年 秋季リーグ優勝



同学年の3人 左から 川北・元山・大塚